

術研究所蔵の河田薫博士採集の標本による), 年平均気温 14°C は大陸に於ける本種の分布北限の指標として不適当である. 日本に於ける本種の分布北限をなすこの緯域は年平均気温 14°C をはじめ夏期平均気温 (5 月より 10 月に至る各月の平均気温の平均) 21°C , 1 月の平均気温 4°C 及びその他各種の平均気温の等温線が一束となつて走る本邦気候上の主要な一気候線をなしている. それでこれらの等温線を大陸に延長すると, 夏期平均気温 21°C 線が同地区のニジュウヤホシの分布北限と最もよく一致するように思われる.

上記の如く気候条件の相異なる日本並びに華北にて大体夏期平均気温 21°C の等温線によつてその位置が指示出来ることは, 夏期即ち生育期間の温度条件が本種の分布に強く影響しているという暗示が得られる. 更に本種は年に 2 世代以上を経過し, 1 世代に終る地域が実在しないことを考慮に入れると, 生育期に於ける有効積算温度の不足が本種の分布を規制する有力な要因であると推察される.

本種はオオニジュウヤホシテントウ *Epilachna vigintioctomaculata* Motschulsky と対照的な分布をなし, 前者の北限と後者の南限とが重り合い, 両種の混雑する地点が見られ, 筆者が先に提唱したオオニジュウヤホシの分布南限帯 (夏期平均気温 20.5°C 線と 21.5° 線の指す間の地帯) がニジュウヤホシの分布北限帯をなすものと思われる.

オオニジュウヤホシテントウの食性に関する研究 (第 5 報) 食餌植物の補遺及び異常食性

小山 長 雄

Nagao KOYAMA: Supplemental notes on the food plants and the abnormal feeding habits of *Epilachna vigintimaculata*.

第 1 報に於て演者は本虫の食餌植物を 7 科 29 種に整理したが, その後観察実験の結果追加すべきもの, 新知見をえたものがあるのでこれを補遺し, あわせて異常食性について若干の知見をのべる. A. 1. ゴボウ (キク科); 幼虫は第 1 齢からは生育不可能であるが, 第 3 齢からは生育し羽化に至る

ものがある. 2. カボチャ, キウリ (ウリ科); 幼虫は第 2 齢から生育するのみならず, 第 1 齢からでもある種の操作を加えこれらを摂食せしめれば全齢生育するものがある. 3. ユウガオ (ウリ科); 成虫の摂食するものとして追加. 4. ヒョドリジョウゴ (ナス科); 成虫及び老齢幼虫はよく摂食する. 1 齢から生育しうるかは追究中であるが, 本虫の自生植物として記録する. 5. ハシリドコロ (ナス科); 成虫はよくこれを摂食するが, 幼虫も生育羽化する. 本種は本虫の分布と共通な点があり, 種存続植物として極めて有力である. 6. マメ科ではササゲが最も被食性が高い. 尙ダイズは現在の所削除したい. 7. ナズナ, タマナ (ジュウジバナ科); 成虫の摂食植物として追加する. 8. フダンソウ (サトウダイコン) (アカザ科); 成虫及び老齢幼虫の摂食するものである. 9. ホモノ科, クワ科, ウラボシ科は葉部摂食せず, 又ヤマノイモの摂食も疑問である. 10. 従つて本虫の食餌植物の種類は現在, 7 科 33 種を数えることになる. B. 本虫の幼虫及び成虫に 1. 卵食性, 2. 蛹食性, 3. パレイシヨ塊茎及び, 4. 紙食性等がみられる. 2, 3 では異常形態の個体がえられた. 尙, 紙を食べた原因は紙に成虫の体液がついたか, 卵汁がついたかで虫はそれらを食べるために紙を食べることを余儀なくされたと考える. (但しここでは異常食性を植物の葉部を食べる以外の食性と限定する) 以上の結果の詳細は別に発表する予定である.

ヒラタカメムシ首科に於ける爪間盤の存在に就いて

松 田 隆 一

Ryuichi MATSUDA: Über das Vorhandensein von Arolien bei den Phloeobiotica (Aradoidea).

現在迄ヒラタカメムシ首科に於て爪間盤の存在することは Ctenoneurus (1924, Myers), Chinomyersia (1928, China et Myers) 及び Zimmermania (1942, Usinger) の属について知られてゐるにすぎない. 筆者は世界の既知属の約 3/5 に相当する 32 属についてその存否を検討しその内 19 属に顕著なる膜状の爪間盤を, 10 属に余り顕著でない